

☐ 話すこと ☒ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☐ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☐ 家庭学習での活用実践の
ポイント生成AIを活用した「書くこと」における言語活動の実践
—生成AI[Copilot]を活用し、表現を比較、推敲しながら内容の質を高める指導—

実証概要

<校数>4校(中学校:4校) <人数>1,000名

<学年>中学校:第2、3学年 <アプリ等> Microsoft Copilot(日本マイクロソフト株式会社)

<AI機能について>文法、語彙、構成の誤りや改善点を即時に提示し、書き直しを促すフィードバック機能を持つほか、文章への返信生成による双方向のコミュニケーションを可能にする。また、教師が生徒の興味や習熟度に応じた課題、モデル文を複数作成でき、CEFR等の基準に沿ったレベル指定にも対応可能である。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●言語面と内容面の改善を行うためのAI活用

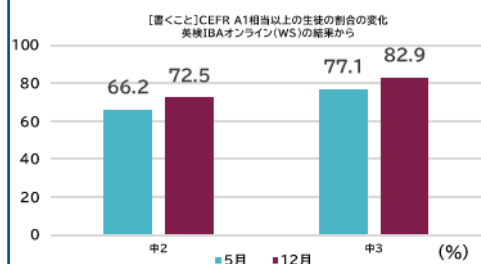
主に中学2年生と3年生の授業で、学年や習熟度に応じてCopilotの活用を取り入れた「書くこと」の指導を行った。2年生では、関心のある事柄や日常的な話題について、「正確に書くこと」や「まとまりのある文章を書くこと」を狙いとし、文章作成や推敲の場面で複数回Copilotを活用して、語句や文法を確認、修正するなど、表現と内容について思考することで、知識及び技能の定着を図った。3年生では、社会的な話題について、考えたことや感じたことを理由とともに書くことを狙いとし、1つの文章を完成させる過程で繰り返しCopilotを活用し、複数の表現を比較、検討することで、身に付けた知識・技能を活用、発揮し思考力、判断力、表現力等の育成を図った。

●「書くこと」において双方向のコミュニケーションを行うためのAI活用

Copilotに「英語で簡単な会話を始めてください。中学生に分かる内容で、5往復しましょう。テーマは好きな○○です。」などのプロンプトを入力し、英語でのやり取りを行った。活動前には、教師が目的や評価の観点を示し、活動中や活動後には、やり取りの内容が学習の狙いに沿っているかフィードバックをした。Copilotは丁寧な説明や励ましを返すため、生徒は自分のペースで安心して書くことができた。このようなやり取りにより、英語を書く必然性が生まれるとともに、教師のフィードバックを踏まえて表現を見直す場面も生まれ、双方向のコミュニケーションの場が形成された。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①生徒の英語力の変化

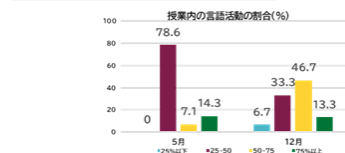


②生徒の関心・意欲の変化

英語で相手の言いたいことを理解したり自分の考えを伝えられるようになりたい
中2:81.5%⇒82.7%(+1.2) 全(-1.9)
中3:87.4%⇒87.4%(±0) 全(-1.1)

英語で書く力がついたと思う
中2:60.7%⇒68.6%(+7.9) 全(-5.9)
中3:61.6%⇒73.2%(+11.6) 全(+1.6)

③教師の指導の変化



5月と比較して12月は、授業内で言語活動が占める割合が高まり、特に「50～75%」実施した授業の割合が増加するなど、言語活動を中心とした授業展開への改善がみられた。一方で、「75%以上」実施した授業の割合は増加せず、言語活動の質と量(発話や記述の量、質)のさらなる向上が今後の課題である。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●他自治体への視察

生成AIを単なるツール導入と捉え、その活用方法を取り入れるだけでなく、言語活動の目的や評価基準を明確にした授業設計の重要性を再認識し、授業改善に生かそうとする意識の変化が見られた。
・神奈川県相模原市・茨城県つくば市 等

●公開授業の開催

モデル校2校で公開授業を実施し、Copilot活用時における教師の単元構想や目標設定の在り方を明確に共有した。参観を通して、教師間で「どの場面でも、何のためにCopilotを使わせるか」を意識した指導への転換が進み、英語科で育成すべき資質・能力を改めて捉え直す契機となった。

●事例集の作成

AI英語活用リーダーは、学校の取組や授業での生成AI活用、生徒の変容に加え、教師の指導上の工夫や意識の変化を整理し、事例集としてまとめた。これにより、各実践を個人の実践にとどめず、教師が共通理解のもとで指導改善を進める基盤が形成された。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

従来の教師による英作文指導は、書いた表現が可視化され、誤りが成果物として残ることへの生徒の心理的負担から、文法の正確さなど言語面に偏る傾向があった。生成AIの活用により、文法チェックや語句の自然さの確認といったことが可能となり、目的や場面、状況に応じた表現の質に指導の重点を移すことができる。これにより、教師は言語面と内容面の指導バランスを意図的に調整し、生徒が状況にふさわしい英語表現を構築できるよう導くことを求められる。また生徒が目的をもって生成AIを活用できるようになるまでには、教師が生徒の学習状況に応じて、プロンプトを設計し、単元や授業の目標に迫ることができるように、学習過程を構成する必要がある。